

登壇者一覧

(敬称略)

役割	所属	役職	氏名
コーディネーター	静岡文化芸術大学	副学長	池上 重弘
アドバイザー	豊橋技術科学大学	副学長	井上 隆信
報告者	LLP マリッジ・ローカル・コネクト	代表	木村 彩香
報告者	NPO 未来化プロジェクト	理事	川端 務夢
発言者	豊川市	市長	山脇 実
発言者	飯田市	市長	牧野 光朗
発言者	駒ヶ根市	市長	杉本 幸治
発言者	高森町	町長	壬生 照玄
発言者	平谷村	村長	小池 正充
発言者	下條村	村長	金田 憲治
発言者	売木村	村長	清水 秀樹
発言者	泰阜村	村長	横前 明
発言者	豊丘村	村長	下平 喜隆
発言者	てほへ	副理事	大脇 聡
発言者	龍山秘密村 (浜松山里いきいき応援隊)	村長	川道 光司

■コーディネーター

静岡文化芸術大学 副学長 池上重弘 氏

静岡文化芸術大学の池上でございます。昨年からは新ビジョン策定委員会の委員長を務めており、この会議にも関わっております。もともとの専門は、インドネシアをフィールドとする文化人類学ですが、1996年に浜松に来てから、外国人住民の増加に伴う地域社会の変化という多文化共生と呼ばれる分野に関心を持ち、牧野市長とは外国



人集住都市会議でずいぶん前からのおつき合いということになっております。

それでは、「住・人」分科会のテーマを確認します。新ビジョンの基本方針4の「住」の、安全安心な広域生活圏の形成、そして基本方針5の「人」の、地域の持続的発展に向けた人材集積地の形成、の2つがテーマになります。

それではまず、新ビジョン案について、事務局からご説明をお願いします。

■事務局

新ビジョン案では、地域連携の基本方針を5つにまとめており、そのうち特に重点的に取り組むものとして、7つの重点プロジェクトを設けております。この「住・人」分科会は、基本方針の「住」、「人」と、重点プロジェクトの6、7について意見交換を行います。

重点プロジェクト6「住むなら三遠南信プロジェクト」は防災体制、婚活事業や移住・定住、女性が暮らしやすい地域づくり、県境を越えた住民交流などが掲げられております。

重点プロジェクト7「人生100年時代プロジェクト」は、子供、学生、行政職員などの交流機会の創出・拡大、地域教育活動の促進、人材の育成・定着化などが掲げられております。

■コーディネーター

ありがとうございました。新ビジョンのうち、重点プロジェクト6と7、人にかかわること、暮らしに関することについて意見交換をしていくということでございます。

それでは最初に、関連事業報告ということで、連携した婚活事業について、LLP マリッジ・ローカル・コネクト代表の木村彩香様からご報告をお願いいたします。

■LLP マリッジ・ローカル・コネクト

代表 木村彩香 氏

LLP マリッジ・ローカル・コネクトの木村彩香と申します。連携した婚活事業、「突撃！田舎にお嫁に来ませんか！？」についてお話しさせていただきます。こちらは、本日同席させていただいている泰阜村社会福祉協議会の松川さんの発想から始まりました。私たち民間企業の橋本がシステムをつくり、私が広げたという形で、行政と民間との連携になっています。

まずご覧いただきたいのは、長野県内の結婚相談所に登録のある男女比率が7対3ということです。私が婚活イベントを始めて5年目になりますが、実際に長野県内の女性がイベントに出てくることは少ないです。一方都市部の女性には、自然豊かな場所で暮らしたいと思っている方が多く、さらに田舎の男性に対して、すごくプラスなイメージを持っております。長野県の男性に対しても、まじめで素朴で優しい、全てプラスの言葉をいただきます。例えば、15年間結婚相談所に登録していた男性が、東京へ婚活に出て成婚が生まれたり、失恋して結婚を諦めていた男性が、このイベントに出て名古屋圏の女性と結婚したり、長野県で婚活していた男性は、県外の女性からすごくモテました。

この「突撃！田舎にお嫁に来ませんか！？」は、4年目になりますが、この地域に移住して結婚するカップルが3組発生しており、4組目、5組目となりそうなカップルもいます。「突撃！田舎にお嫁に来ませんか！？」は、長野県内の独身男性が実際に東京や名古屋へ出て行って、女性と2回に渡る婚活イベントを実施いたします。私も神奈川県出身で、東京で働いていたときに、地方の婚活イベントに1泊2日で行くのは、自分の予定が制限されると感じていましたが、都市部の女性が足を運びやすい場所で田舎の男性に会えるというのはすごくメリ

ットになります。同時に参加自治体の市町村のPRにもなりますね。田舎で暮らしたい、自然が好き、農業がしたい、林業がしたいという女性が多く来場されます。婚活イベントと同時に移住相談ブースをつくっており、ふるさと回帰支援センターの担当者が実際にそのブースに出向いたこともありまして、移住相談ブースは、毎回女性の列ができるほどすごく人気になっております。

過去に名古屋と東京で開催いたしました婚活イベントの結果です。名古屋から見ると三遠南信地域は移住が考えられる範囲の距離で、すごく強みがあります。名古屋でのイベントは大体20人から30人の女性が来場されますが、東京では30名ほどの予約があっても当日キャンセルが多く、名古屋の女性のほうが、田舎に住みたい、長野県の男性と結婚したいという気持ちが強い傾向にあると思っております。

「突撃！田舎にお嫁に来ませんか！？」は、現在7市町村が連携でしており、ひとつの自治体ではできないことを、複数自治体で連携することによって、仕事を分担できますし、南信州のよさをPRしていくことができます。横のつながりを大事にして、個々の自治体での人口の取り合いではなく、協力していくことが大事だと思います。

システムにもメリットがあります。男性は1日に20人から30人の女性と会いますので、経験値がすごく上がります。また1か月前に事前レクチャーを必ず行い、服装のチェックなど、イベントまでの期間を私たち民間の団体がサポートさせていただきます。

移住と婚活はすごく相性が良く、女性は「いい人がいたら、その地域に行きたい」と必ず言います。「突撃！田舎にお嫁に来ませんか！？」は、地域の男性と都市部の女性をつなぐことによって、地域への移住促進にもつながります。今の時代、移住、結婚、少子化対策の一つだけを進めるのはなかなか難しいです。豊かな自然、名古屋か

らの近さ、という三遠南信地域の強みと、移住、結婚、少子化対策の三方よしの取組を、広域で連携するということがすごく大事だと思っております。

■コーディネーター

ありがとうございました。それでは続いて、若者の人材育成についてということで、NPO 未来化プロジェクトの川端務夢様に報告をお願いします。

■NPO 未来化プロジェクト 理事 川端務夢 氏

NPO 未来化プロジェクトの川端と申します。

この NPO 未来化プロジェクトは、平成27年に浜松を中心に地域を盛り上げていく人材の発掘と育成を目指して設立された団体です。その中で次世代、若者の育て方をどうしていこうかという課題に対して取り組んでいるのが、この「浜名湖若者1,000人会議プロジェクト」です。浜名湖、とありますが、浜名湖から何 km が浜名湖圏内か、というお話ではなく、象徴的な場所として浜名湖を設定しているだけで、基本的には遠州三河の若者のため、我々年寄りが伝えていこうというプロジェクトです。

現在の若者の感覚ですが、まず、ものづくり中心志向は、悪いことではない成功体験の呪縛があるそうです。また、強烈な競争体質で、仲間以外は排除することも若干あるようで、例えば、A 組織と B 組織の仲が悪いとか、この地域とこの地域の仲が悪いとか、そういう対立が地域活動に支障を来しているようです。もう一つは、男性志向が強くて女性蔑視的なところも若干あるのではないのか、ということも若者の感覚です。きちんとリサーチをしたわけではないですが、我々がおつき合いさせていただいている若者の感覚は以上のようなもので、このような環境ではリノベーションは起こしにくいです。

それでは、次世代を担う若者には何が必要でしょうか。我々は、社会性を持った若者が自分の位置を確認できるような若者同士のネットワーク、それから、よりよい地域連携を築くためのシステムを学ぶ場、それらの解決をサポートする専門家、の三つだと考えました。

そんな中、次世代に対する我々大人のミッションは何だろう、ということで、地元の若者ないしは県外在住の地元の出身若者と、大人サポーターによる大会議をやったらどうだというアイデアが出てきました。若者1,000人会議は、決して目新しいフレームではなく、高知や、長野県の東信でも既に行われていますが、住んでいる若者たちはそれぞれ違います。その若者1,000人、そして大人のサポーターが入ることによって化学反応が起き、そこで人が育つ、ということ了我々の目標としたいと思っています。世界中から人が集まる地元の未来づくり、未来の地元を担う核となる若者の育成です。我々は2022年に浜名湖若者1,000人会議を開催しようと思っていますが、そのプロセスを、今年から始めています。遠州と東三河の若者に、社会的課題をビジネスの手法で解決できるソーシャルビジネス・アントレプレナーという手法を学んでいただき、その若者が核になって、自分たちなりの若者1,000人会議を構築して、地域に貢献できる産業や事業フレームをつくってもらえたらいいのではないかと考えています。「自分たちの未来は自分たちでつくる」をテーマに、今年から2020年まで3期にわたってソーシャルビジネスのフィールドワークや座学を行い、2022年に1,000人の若者が集まって化学反応を起こしながら地域活性を行うという構想です。また、既に地域の活性化に活躍していてこのような学びは必要のない若者もおりますので、その方たちとも連携しながら、三遠南信地域の課題を自分たちのこととして考える若者を育成したいと思

っています。

実は昨日、浜松の市民協働センターでセミナーを行い、菊川市より西側の若者約30人近くが集まりました。富士市から参加してくれた方もいます。また、愛知大学の戸田ゼミナールのご協力をいただいて、愛知大学でも10月からセミナーを始めています。

我々は次世代の若者のため、いろいろなフレームをお伝えしながら、社会の課題を解決する人材をどんどん育てて、それがソーシャルビジネスでなくても、ビジネスでも結構だと思っています。本来ビジネスというのは、どれも社会をよくするために存在していると我々は認識しておりますので、あえて申し上げるなら、地域の産業の軸も含めた収益性を持った継続的な活動ができる若者を育てていきたいというプロジェクトでございます。

■コーディネーター

ありがとうございます。最新の状況なども含めてご紹介いただきました。

それでは、ここから意見交換に移りたいと思います。重点プロジェクト6「住むなら三遠南信プロジェクト」、重点プロジェクト7「人生100年時代プロジェクト」という2つのトピックを扱います。

先ほどの全体会の登壇者や観覧者は私を含めて、ほとんどが男性でした。女性や経験を積んだ年配の方、この地域の特色として留学生とか定住外国人など、様々な方が集まって、2030年に向けてこれからの10年を考えていかなければいけないのに、50歳代の男性ばかりで、何か説得力がないなと思っていました。幸いこの会場では、女性の方々の顔が見えて、こうでなければいけないと思って少し安心しています。ただ、本日は時間が限られていますのでフロアからのご発言はできないのですが、ぜひここでの発言を踏まえて、この後の交流会等で意見交換ができればなと思っています。

それでは、重点プロジェクト6「住むなら三遠南信プロジェクト」、住民が住み続けたいと感じる地域づくりのためにどんな取り組みをすればいいか、という意見交換に移ります。私自身、実は生まれも育も北海道札幌で、約20年前に親戚や縁者、友人、知人が全くいない浜松に来ましたが、今やここがすっかり気に入っています。先ほど婚活イベントのお話もありましたが、他地域から来た人が、ここに住んでみたいと思うような地域づくりにどんな取り組みが必要かについても、ぜひお話をいただきたいと思います。

では最初、NPO 法人てほへ副理事の大脇聡様からお願いします。

■てほへ 副理事 大脇 聡 氏

私たちは、日ごろは東栄町を拠点に活動しておりますが、私の本職は和太鼓プロ集団志多らという、プロの和太鼓チームのプロデューサーです。その志多らが地域を元気にしようということで立ち上げた法人が、この NPO 法人てほへで、この両輪で活動をしています。本日午前中に三遠南信地域住民セッションが行われ、てほへは三遠南信住民ネットワーク協議会にも入っており、分科会にも参加させていただいております。

住民セッションでは、「地域おこし協力隊の連携ということテーマとしてほしい」と SENA からお話があり、どんな形で進めようか協議会で話をしました。我々は活動しながら、いろいろな地域の協力隊ともかかわっていますが、本当に協力隊の連携が必要なのか、協力隊の任期を終えて定住した人の連携が本当に必要なのかと考えた時に、連携しなくてもできることはあるし、協力隊員以外にも地域に戻ってきて、地域のためにいろいろなことをやろうという若者もいます。私も25年ぐらい前、地域おこし協力隊の制度がある前から東栄町に移り住んでいますが、若者が地域に住み続けて

活躍していくためには、自分の活動を継続していくための経済的な要素が必要で、そういう面での連携が大事ではないかということ、OB・OG フォーラムでは話し合いました。

都会の若い子が志多らにいっぱい来ますけれども、みんな太鼓のプロになりたいという夢を持って来ますし、私たちの回りにいる若い人たちをみていると、自分の望む生き方をするにはどの地域が合っているかと考える人が多いです。自分がやりたいこと、仕事、生きがい、結婚、地域の方とのかかわりなど、いろいろなものがそこで住みたいという思いになりえて、それらと地域がどうマッチするかということが一番大事だと思います。それら全てがそろっていることはおそらく都会でもないでしょう。この地域では、こういうことができる、こういう人がいる、という求心力のようなものを行政の区分だけではなくて、三遠南信地域で連携して持っていくことで、全国の中でこのエリアのどこかに住みたい、となるのではないかなと思っています。

■コーディネーター

ありがとうございます。自分の生きざまを体現できる場所としての三遠南信の魅力を連携して発信していく、というアイデアをいただきました。

それでは次に、売木村の清水秀樹村長をお願いします。

■売木村長 清水秀樹 氏

私は、売木村に住んでもらいたいというところからお話をさせていただきたいと思っています。

私は、交流の中から定住を、ということで村づくりをしております。そう思ったのは、私が村長になる前の平成18年に「うるぎ米そだて隊」というイベントがきっかけです。もみまきから始めて最後の稲刈り、

脱穀まで年7回、参加者に売木村へ足を運んでいただくというイベントです。7回足を運んでいただくと、村が非常に身近な存在になります。またイベントに参加してくれた皆さんが、今度は農作物を持って、豊橋、浜松、名古屋などに一緒に売りに行ってもらったり、友達を紹介してくれたりして、売木村のファンになってくれた方や、中には移住してもらった方もおられます。その経験から、まず村を知っていただき、来ていただくことで、村に愛着を持ってもらうことが一番大事ではないかと思っており、「売木の村長はイベントが好きな村長だ」と言われますが、村を知っていただくためのイベントをいつも開催しております。

また、元気な村には人が集まってくるという、私の強い思いがございまして、村の活力を発信するため、マラソンランナーの合宿地を目指して政策を進めており、おかげさまで3,000人を超すランナーが、村に合宿に来るようになりました。若い人たちが走っていると、「この村は元気なんだ」と感じていただけ、そこにやはり人が集まってくるとおもっております。

それともう一つ、売木村は小さな村で4つの峠に囲まれた盆地なのですが、田んぼがあって、周りに山があって、「ああ、田舎だなあ」と、感じていただく村の風景を残しておくことが、これからの時代には癒される村として、移住などにつながってくるのではないかと考えております。

■コーディネーター

ありがとうございます。まずは村を知ってもらって、それが移住につながるというお話でした。実は昨日、島田市でフルマラソンを走りましたが、「売木村」というTシャツを着ている人が走っているのを見かけました。

■売木村 清水秀樹 氏

「売木村」と入ったTシャツを販売していて、それを着ていろいろなマラソン大会に出ています。それもPRになっていると思います。

■コーディネーター

今度私も着て走りたいと思います。

それでは続きまして、下條村の金田憲治村長にお願いします。

■下條村長 金田憲治 氏

先ほどマリッジ・ローカル・コネクトさんから婚活のご報告があり、それを応援する意味で発言させていただきます。

私の村は少子化による人口減少が大きな課題でございます。村の現状と、その課題に対して取り組んでいる事例を申し上げて提言をさせていただきたいと思っております。

下條村の面積は38.12km²で、長野県の中で4番目に小さい村です。海拔332mから828mの間に14の集落があり、農業と製造業が主な産業です。人口は、本年度10月1日現在で3,770人です。平成4年とほぼ同じ人口で、平成14年ごろに4,200人ほどまで増えましたが、その後減少傾向となり、ここ3年はその傾向が強まっています。平成27年の合計特殊出生率は、1.82という比較的少ない数字ではありませんが、国立社会保障・人口問題研究所の将来推計によりますと、2040年には2,800人まで人口は減ってしまうということでございます。

総務省の自治体戦略2040構想研究会でも、人口減少と高齢化については、未曾有の危機というような表現をされております。私どもも、平成4年度から、定住住宅の建設、中学生までの移住の無料化、安心して子育てができる環境づくりなどに取り組んでおります。

その後も、高校生の通学補助、保育料無料化、子育て支援センターの建設など、環

境は整えてきましたが、なかなか減少に歯止めがかかりません。1番大きな原因は少子化で、中学生は1学年平均50名に対し昨年度の出生が20名程度と非常に少なくなっています。また、30代の未婚率が30%ほどで、その方たちからは、いい相手がいれば結婚をしたい、ということをお聞きします。そういう点で婚活イベントは効果的である反面、イベントに参加する人はまだ一部で、参加しない方々もいるので、そういう層まで幅を広げていく必要があると感じており、広域連携で婚活を進めていただくと非常にありがたいと思っております。

■コーディネーター

ありがとうございます。厳しい少子化の状況の中で、住宅や保育料といったところで村が大幅な財政支援をしていること、また、婚活に期待している一方で、婚活イベントに参加できない、しない人たちにも何か方法があればというお話をいただきました。

それでは続きまして、豊丘村の下平喜隆村長、お願いします。

■豊丘村長 下平喜隆 氏

豊丘村は、南信州広域連合で考えた「ダーチャ」という地域おこしの一つのスタンスを進めています。

「ダーチャ」とは、旧ソ連で普及したもので、国が給料を払えないから、住民に自分で食べ物をつくってもらおうというものです。国が都市部の住民に、車で1、2時間のところへ1戸当たり約1aの土地を与えました。それで自分の食べ物は自分で作り食いつないだけですが、それが現在になっても、そのまま都市部の文化として残っています。大都市の皆さんは、郊外に住宅付きの手づくりの家と畑を持っていて、必ず土日になると家族でそこへ行って、食べる物をつくって、家族のコミュニケーション

を兼ねて帰ってくるそうです。

日本でも、既に企業版ダーチャとして、山梨の都市ではいくつかの会社が動き出しています。この地域でも南信州広域連合の第1号を豊丘村でやってみてはどうかと、飯田市長の助言があり、我が村としましても、民間企業へ従業員を派遣して、まずは第1号の企業版ダーチャをやってみようと思っています。

なぜ企業版かと申しますと、都市部の企業では従業員の精神疾患が非常に問題になってきており、メンタルなものに対しては、自然や農業は効果が高いらしく、最初のころは、いやいややっていたものが、土日を挟んで次の月曜にはみんなの目が輝いて、チームのまとまりもよくなるということです。日本では、土地は個人が持っているので、個人と企業の間には行政が入って、企業版ダーチャをやることで、都市と田舎の交流を深め、いろいろなものが生まれてくるのではないかと、現在具体的に相手の企業を探し始めているところです。

また、三遠南信地域の都市部の皆さんにおきましては、これについて広めていただければありがたいと思います。

■コーディネーター

ありがとうございます。ダーチャは菜園つきのセカンドハウスというような一般的な理解があらうかと思いますが、それを企業向けにということに特色があることがよくわかりました。ありがとうございます。

それでは続きまして、泰阜村の横前明村長にお話をお願いします。

■泰阜村長 横前 明 氏

最初に LLP の婚活のことについてご報告をさせていただく時間をいただきまして、私からも御礼を申し上げます。ありがとうございました。

さて、住み続けたいと感じる地域づくりということですが、私は移住者にスポットを当ててお話をさせていただきます。泰阜村へ移住をしてきた、子供のいる若い夫婦に、なぜ泰阜村、なぜこの地域に移住をしたのかというお話を伺いました。一番は子育て環境がよかったということでした。子育て環境といっても、補助金などではなく、自然環境がよかったということでした。それから、三遠南信地域は東京から遠く、ゆっくりとせざるを得ない、という価値もあるそうです。中国地方への移住者も増えていて、同じように都会から遠いことこそいい、という価値観が若者の中にあると言われています。

これは、豊かさをはかるものさしが、物質的なものから心のゆとりにさらに変わってきていることも影響しているのでしょう。内閣府の国民生活調査では、昭和47年と平成24年を比較すると、豊かさを物質的に依存する人は10ポイント減って30%に、心の豊かさやゆとりに重きを置く人は27ポイント増えて64%になったことを見ても、物質が豊かになったとも言えますが、若者が求める価値観も変わってきていることが分かります。

三遠南信地域は、都市部から中山間地域まで幅広く、またリニア中央新幹線の開業によって地域が変わるかもしれませんが、中山間地域では、自然の中で伸び伸びと育てられる環境と、それをきちんと行う仕組みが大事だと思っています。泰阜村にはNPO法人、教育センターがあり、そういったプロ集団がいて、自然の中で保育をしていく仕組みをきちんとつくることできれば、子育ての環境がいい田舎への移住者が増えると思っています。

■コーディネーター

ありがとうございました。東京から遠いこと、ゆっくりせざるを得ないメリットが

ある一方で、リニア中央新幹線の開業でどう変わるのかという大きな問題もありますね。

それでは、豊川市の山脇実市長にお願いいたします。

■豊川市長 山脇 実 氏

豊川市は平成28年に第5次総合計画が終了し、新たに第6次総合計画を策定しましたが、その大きなテーマといたしまして、人口減少問題に対応するため、子育てをしながら女性が働きやすい環境づくりに取り組み、「子育てするなら豊川市」と言われるような施策を進めています。国勢調査の結果、平成27年までの5年間で、東三河全体では人口が減少しましたが、おかげさまで豊川市はわずかですが増加しており、これからも子育て支援に力を入れていきたいと思っています。具体的には保育園や児童クラブでの子育て支援の充実、全ての小・中学校の普通教室へのエアコン設置などを進めています。今年は猛暑で、豊田市では小学生が熱中症で亡くなるという、いたましいニュースが全国で大きな話題になり、国を挙げて小中学校のエアコン設置に取り組んでいますが、3期目の就任時に掲げた施策がこのような形で取り上げられることとなり、実施にあたって非常にタイムリーな事業であったと思っています。

人口増加には、結婚と出産がポイントであり、農協や青年会議所と協力して縁結び事業等に取り組んでいますが、残念ながらなかなか思うような成果は出ていません。一方、転入促進の施策において、豊川市内の主要な7つの鉄道駅の周囲800m以内に、市外にお住まいであった方が家を建てて住んでいただければ、固定資産税相当額を交付するとともに中学生以下のお子さんがいらっしゃる世帯の場合には、上乘せの奨励金を交付する事業を始めました。今年は9月末時点において23件の申請があり、今後

にさらなる効果が出てくると期待しています。

また、災害に対する市民の皆さんの不安が大変大きいということで、災害への備えとして、平成31年の完成に向けて防災センターの整備を進めています。今後も「子どもたちの笑顔があふれ安全安心で人にやさしいまちづくり」をしっかりと進めていきたいと思っています。

■コーディネーター

ありがとうございました。

ここまで、重点プロジェクト6の「住むなら三遠南信プロジェクト」についてのご意見をいただきました。ここからは、重点プロジェクト7「人生100年時代プロジェクト」のパートに移ります。この地域の未来を担う人材の育成や、定着のためにどんな取り組みをするか、ということでお考えをお聞かせいただければと思っています。

それでは高森町の壬生照玄町長からお願いいたします。

■高森町長 壬生照玄 氏

市田柿発祥の里の高森町の壬生です。よろしく申し上げます。

人材育成や地域教育の促進というのは非常に難しいテーマですが、まず三遠南信地域の歴史や文化を小中学生に浸透させることが必要です。けれども、メディアで三遠南信地域全体が取り上げられる機会というのは非常に少ない上に、テレビの放送地域や新聞の圏域が違って行く中で、小中学生に同浸透させていくのかということ是非常に難しい状況です。それから、今の小中学生、高校生は、勉強に費やす時間が多く、三遠南信のことを考えると、地域のことを考える時間があまりないのではないかと考えています。そういった時間をつくるために、例えば、昔のゆとり教育の中で地域

を考える時間をつくる、というような根幹のところから政策を打っていかないと、三遠南信地域を語るとか、文化を交流させることは難しいかなと思っています。

その一方で社会人教育を考えると、先ほどものご報告のあった1,000人会議のように、大学生や若者に対してアプローチをかけていくということは非常に重要で、できれば飯田下伊那や上伊那にも、そういった活動が広められないかと感じていました。特に、南信州にそれは大学がないので、浜松や豊橋の大学にかかわっていただいて、三遠南信地域で、人材育成を進めなければいけません。高森町でも社会人学校を開いていますが、皆さんへの指導や話ができる人材をつくっていかねばいけないと感じていました。

■コーディネーター

ありがとうございました。地域の大学とどうかかわるか、私たちも宿題をいただいた感じがあります。

それでは次は、龍山秘密村の村長という立場で、浜松山里いきいき応援隊の川道光司さんにお話をいただきます。

■龍山秘密村（浜松山里いきいき応援隊） 村長 川道光司 氏

浜松市の龍山町で地域おこし協力隊をしております川道と申します。村長とありますが、自治体の村長ではありませんので、ご承知おきいただければと思います。

龍山町への移住者という立場でお話をさせていただきます。正直、龍山町に何か特出すべきものがあつたかということ、これといったものはありませんでした。僕は自然が好きで移住してきましたが、以前住んでいた、富士山の周りのほうが自然環境はすばらしかったですし、環境面もとてもよかったです。龍山町が決め手になったのは、人でした。僕の友人が前任の地域

おこし協力隊で、その方連れられて、地域の方々と交流したときに、とても温かい歓迎の気持ちを感じ、ぜひここでやっていると、ここに住むことを決めました。

そうやって人が人を呼び、全てのことがとんとん拍子にうまく進んで、たった2年半でも安定して住むことができている、今度は僕自身が必要な人材を呼びたいと思っています。ただ、僕だけの力で、全国から必要な人材を呼び込むのは難しいので、人を呼び込む補助制度や支援制度があれば、それを利用して新たな人材を生んでいきたいと思っています。地域おこし協力隊という制度で行政の方々が人を呼び込もうと働きかけていただいているのですが、そのこと自体を委任してもらい、僕自身が地域おこし協力隊の窓口として人を呼んでこられれば、次につながっていくのではないかと考えております。

■コーディネーター

ありがとうございました。先ほど、望む生き方を実現できる場所を選ぶ、という話が出ましたが、一方で決め手となったのは人であったということでした。また、人がまた次の人を呼んでくるけれども、個人のネットワークや能力には限界があるので、支援の制度ができるといいなという、重要な指摘でした。

それでは次は、平谷村の小池正充村長にお願いします。

■平谷村長 小池正充 氏

平谷村は標高が920m、人口は440人弱で、ともに三遠南信地域では一番と思っています。三遠南信地域には、都市から小規模の自治体、そして自動車産業から農林業まで、さまざまな産業が存在しております。それぞれの自治体や企業の得意とする分野で地域や産業の壁を越えて、学びや体験の機会の提供をし合い、地域内の人材の育成

や定着につなげていきたいと思っています。

平谷村では未来を担う子供、地域住民が遊びたい、学びたい、働きたい、暮らしたいと思える魅力的な村づくりを目指し、ヒラヤ・キッズ・ビレッジ・プロジェクトという教育を軸とした活動を行っています。ヒラヤ・キッズ・ビレッジ・プロジェクトは、教育委員会を中心に小学校、地域住民、都市部の大学生、地域おこし協力隊が連携しながら、地域の子供たちがさまざまな人材や多様な学びと接する機会を創出しています。

プロジェクトの活動の一つの大学生受け入れ事業で、平谷村の小学生が、大阪教育大学の学生との放課学習、野外炊飯や小学生都市体験等を通じ、普段接することが少ない都市部の大学生と触れ合い、互いに学び合っています。単なる交流だけにとまらず、持続性のある体験に基づいた学びに触れることによって、地域の特性を深く理解した人材、地域の未来を担う人材を搬出できると考えています。

小中高生が三遠南信地域で多様な学びに接し、地域の魅力を発見し、自身の未来の夢を描ける地域づくり、教育環境づくりにともに広域生活圏のネットワークの形成の提案をするところでございます。

■コーディネーター

ありがとうございました。教育委員会が主導するヒラヤ・キッズ・ビレッジ・プロジェクトについて重点的にお話をいただきました。村にしながら、都市の若者たちとも接点を持てるというお話しでした。

それでは次に、駒ヶ根市の杉本幸治市長をお願いします。

■駒ヶ根市長 杉本幸治 氏

ここまで皆様のお話をお聞きして、地方が抱える少子化の問題、人口減少という課

題は、どこも同じだと思います。

今、駒ヶ根市は、地域の財産をもう一度見つめ直し、それを活かしたまちづくりをしようと取り組んでおります。駒ヶ根市の1つの財産はJICAの青年海外協力隊の訓練所があることです。今年の3月には、青年海外協力隊のOBがつくっている青年海外協力協会の本部が東京から駒ヶ根に移ってまいりまして、正規の職員30人、その家族20人、合計50人が一気に駒ヶ根市に来ていただきました。

その中で、JICAの訓練所には語学のできる先生が大勢いるものですから、大学生の皆さんにJICAボランティアの訓練に参加してもらい語学を学ぶ、駒ヶ根グローバルユースキャンプを、平成29年から実施しています。今年は横浜国立大学の大学生が何人か駒ヶ根に来ていただきました。取組を進める中で、地域に興味を持っていただき、それが移住・定住につながればいいなと思います。

これからの新しい取組として、三菱総研と逆参勤交代を進めています。逆参勤交代と言っても分からないですよ。都会で働いて疲れている皆さんが田舎へ来ると元気を取り戻すということで、大企業に田舎の事務所をつくってもらい、2、3か月田舎に来て仕事をして、リフレッシュして都会に戻ってもらう、という取組を進めています。逆参勤交代をするなら、三遠南信地域へ、といった受け入れ先のチームをこの地域で組めたらおもしろいのではないかと思います。駒ヶ根市でもテレワークオフィスを一か所つくりました。そのおかげで、女性の皆さんが働く場所ができています。

また、平成23年に田舎暮らし推進協議会というワンストップの移住者受入窓口をつくりました。銀行、不動産会社、行政、建設会社、全てを1つの窓口で案内するもので、平成23年に9組22人だった移住者が、去年は62組152人まで増えました。また、移住して

来た皆さんが、駒ヶ根ってこういうところで、一緒に来て事業を始めないか、というネットワークによって何人か来ていただけています。今は、ハウス型の農業を一つのグループになって起こしていただけており、移住者が安心して来られる、そういうネットワークも貴重ななと思っています。

それから子供たちには郷土愛プロジェクトに取り組んでいます。小学校や中学校に地元の企業の皆さんが行って、地元にはこんな企業あるよ、とPRします。高校生は、生徒、親、先生と一緒に企業等を回り、これからの未来を高校生の皆さんに託すという言葉をかけています。私も、成人式など機会があれば、これからの自分たちをどう考えるかという動機付けをしています。

しかし、少子化については一生懸命取り組んでいますが、なかなか歯止めはききません。これからの子育て世代の皆さんに、少子化が進んでしまったら、これからの未来、自分たちの世界がどうなってしまうのかを感じてもらわなければなりません。ご報告のあった1,000人会議のように、それぞれが主体者となってまちづくりを進めるような取組をしていきたいと思っています。

もう一つ大きいのは連携です。連携なくして地域の発展はありませんので、それぞれの地域が全てを用意するのではなく、あるものをお互いが補完しあって、三遠南信地域の連携も、もっと進めるべきだと思います。ただ南信州の場合は、どうしても山の峠を越えなければならず、東三河と遠州と連携するには少し工夫が必要だと思いますので、皆さんからまたアイデア頂ければと思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。JICA、JOCAを地域資源として活かす、大学生を呼んでグローバルユースキャンプをする、逆参勤交代という企業からの受け入れをする、非常

に斬新なアイデアをたくさんいただきました。

それでは、飯田市の牧野光朗市長にお話をお願いいたします。

■飯田市長 牧野光朗

地域の将来を担う人材育成について、お話をさせていただきます。我々が地域人と呼んでいる「地域を愛し、地域を理解し、地域に貢献する人材」をどうやって育成するかということが、非常に大きな課題だと思っています。

市町村の教育委員会は、基本的に義務教育を担当しているという意識がありますから、小学校、中学校においては、地域人材の育成に取り組んでいるところが多いと思います。飯田市でも、小中一貫教育やコミュニティスクールの導入など、地域と学校との関係を強めて、子供たちが地域を学んでもらう機会をつくっています。問題は、高校生です。若者の進路の転機は、高校卒業時にあり、飯田市では約7割の高校生が一旦地域を離れていくという状況で、そのままでは帰って来ません。高校生までの期間に地域人材としての学びを身につけてもらうことが重要になると思います。

飯田市では現在の飯田OIDE長姫高校、松本大学と3者でパートナーシップ協定を結び、飯田OIDE長姫高校商業科の正式な単位科目として、地域人教育を導入しました。今年で7年目になりますので、地域人教育を受けた高校生が3度卒業していることとなります。この取組によって、地域のことについて考える高校生が非常に増えてきました。高校1年生の最初の授業は私が担当するのですが、「地域のことを考えるなんて面倒くさい」とか、「うざい」という感じが、伝わってきます。しかし、高校3年生の12月になると、目の色が違ってきます。高校生が、地域人としての素養を身につけ、地域のことを自分のこととして考える人材に変わる

のを目の当たりにしています。

このことは、私も様々な場面で話をさせてもらっています。文部科学省も非常に注目し、今年の骨太方針で高校教育改革の一つの柱として地域人教育が取り上げられていますし、私も参加している教育再生会議でも重要な柱になってきています。地域人教育を全国展開していく流れができ、大学と高校と地域の皆さん方で、どのように展開していくかということが、考えられています。

地域人教育で重要なのは、高校の教育と地域を結ぶかけ橋になるコーディネーターの存在です。文部科学省は、飯田市の例のほかに、離島の高校に本土から高校生が通ってくる島根県海士町の例を取り上げています。2つの共通点は高校と地域を結ぶコーディネーターがいるということです。海士町ではこのコーディネーターをNPOが担当しています。NPOが行うことはもちろんいいことですが、継続的に行うためには課題も多いと指摘されています。飯田市ではその役割を若い公民館主事が担い、継続性が担保されているということで評価されています。横展開のときには、このコーディネーターの役割を誰が担うかが重要になると考えています。

■コーディネーター

ありがとうございました。高校生向けの地域人教育ということで、地域と学校を結ぶコーディネーターを公民館主事が担い、継続性を担保するとのことご報告いただきました。

ここで、分科会のアドバイザーである豊橋技術科学大学の井上隆信副学長にコメントをいただければと思います。

■アドバイザー

豊橋技術科学大学 副学長 井上隆信 氏
皆さんのお話を聞いていて感じたのは、

人が人を呼ぶということです。魅力ある人がいないと人は集まってこないだろうと思いますし、その魅力ある人をどうやってつくるのかということが、重要だと思いました。

もう一つは、牧野市長の言われた地域人教育です。小学校、中学校、高校で村を愛する子供をつくれれば、女性が村から出ていっても、結婚相手を連れて村に戻って来て人口は増えるだろうと思います。

出て行った女性はなぜ戻って来ないのか、戻って来るためにはどうすればいいのかを考える必要があります。理系の発想で言うと、少子化や人口流出という現状から、なぜそうなっているのかという課題を抽出し、それを解決するにはどうすればいいかということを考えますが、その際に他と同じ発想をしていたのでは埋もれてしまいます。それぞれの自治体プランがあると思いますが、何かきらりと光るものを持ってもらうということが一つ。もう一つは、この三遠南信地域が一体となって、いかに外から人を呼んでくるかということ、その人たちを、自分たちのまちに引っ張り込むということ、その両方の観点から、それぞれが特徴を活かして、それぞれの地域が伸びていくようになってもらえたらいいなということを感じています。

■コーディネーター

ありがとうございました。私も、人が人を呼ぶということは、とても大事だと感じています。その場所が気に入って移住したけれども、とんでもない人間関係に巻き込まれてまた引っ越していったというネット上での話を、私も逆の意味で興味を持って読むことがあります。やはり人という条件があって初めて移住の条件を満たすのだろうと思って聞いておりました。

ではここからは、重点プロジェクト6「住むなら三遠南信プロジェクト」、重点プロジ

ェクト7「人生100年時代プロジェクト」のどちらでも構いません、どなたでも自由にご発言をお願いしたいと思います。

■下條村長 金田憲治 氏

新ビジョンで、現行ビジョンと違うのは、地域おこし協力隊のネットワークではないでしょうか。ご報告のあった婚活も地域おこし協力隊の方を中心に市町村の連携ができたということです。今までは行政の連携が主でしたが、そうではない新たなネットワークの一つではないかと思っています。

下條村も昨年度から地域おこし協力隊を採用し、現在2名の方が、それぞれ目的意識を持ってやっていただいで、新たな動きが出てくるかなと期待しています。

■コーディネーター

ありがとうございました。それでは、地域おこし協力隊の川道さんに、そのネットワークについてどう考えるか、お話いただけますか。

■龍山秘密村（浜松山里いきいき応援隊） 村長 川道光司 氏

地域おこし協力隊のネットワークについて、僕は必要ないと思っています。というのは、地域おこし協力隊の会合や研修が結構あるのですが、杓子定規の会議であって、参加しても、ほとんど得るものがなかったからです。自分が必要な情報や人には自分で接触できますし、無理やりそういう場を設ける必要性はあまり感じませんでした。

ただ、今回参加して思ったことは、たまたま自分に必要な人材が見つかる場合もあります。なので、単純に地域おこし協力隊というくくりでくくってしまうのではなく、それぞれのやりたいことや興味、目的でカテゴライズして、それが合った人たち同士が集まるネットワークであればとても有効だと思います。

■コーディネーター

非常に明確なお話をいただきました。必ずしも、地域おこし協力隊というくりである必要はなく、同じ目的を持つ者同士で集まる方が効果があるのではないかと、というお話でした。これについて金田村長、どうでしょうか。

■下條村長 金田憲治 氏

私どもも、地域おこし協力隊を採用する際には、移住・定住と婚活というテーマをもうけました。今年度は6次産業をやっていただけの方を募集させていただいています。

■コーディネーター

ありがとうございました。

他に発言しておきたいという方はいらっしゃいますか。

■てほへ 副理事 大脇 聡 氏

今のお話の延長ですが、移住しても、Iターン者から村人になるためには相当時間がかかります。我々も20年前に東栄町に来た時、なかなか地域の方はなじんでくれませんでした。地域で活動していても、周りには関わりにくい、なじんでいきたくてもなじめない、というところもあると思います。僕たちは長年住んで、メンバーが結婚したり、子供ができたり、志多らの肩書のないいろいろな場面で住民お付き合いすることで、村人になっていきました。地域おこし協力隊の制度が始まって、地域に根づいて活動していきながら、まだ村人になるまでは時間がかかります。その人の努力や周りの支えもありますが、そこに至るまでには、地域おこし協力隊という枠を超えた連携のほうが大事ではないかと思えます。三遠南信住民セッションでも、皆さん同じような意見でした。

■コーディネーター

ありがとうございました。今の件についてご意見のある方いらっしゃいますか。

■売木村 清水秀樹 氏

地域おこし協力隊もそうですが、Iターンをしてきた皆さんが地域に定住できるのは、本当に真剣になって移住者をサポートしてくれる人材が、その集落にいただけで随分違うと思っております。私の村には、いろいろな悩みを一緒になって聞いてくれたり、いろいろなところに連れ出してくれたり、サポートしてくれる人材がいて、随分助かるなど常々思っています。

■駒ヶ根市長 杉本幸治 氏

私たちの地域でも、移住してきた皆さんが、よりどころとなるところがないと、不満がたまってしまって、地域から孤立してしまうことがあります。移住者が増えてきて、みんなが集まる場所をつくってもらいたい、またその場にはこういう人も呼んでもらいたいという要望があり、丸いテーブルを囲んで意見交換をするような会をどんどんやらせていただきました。

それから、何かがあればこの家に来てください、という場所をつくりました。住人の皆さんとの確執は、お互いに不満がたまり、その不満の言葉がいろいろなところに発信されて、地域のイメージも悪くなりますので、いろいろな相談ができる場所があると効果的です。

それから、全ての地区ごとに市の職員を配置しています。担当の地区の移住・定住に関する相談の方が市役所の窓口に来たときには、最初にその職員と話をします。その地域について、例えばごみはこう出さなければいけない、こういう仕組みがあって、何かあったときは相談に来てください、という話をして、行政もあなたのことを大事にしていますよという姿勢をとっています。

この体制を組んでから3年ぐらいになりますが、いろいろな相談を聞く中で、行政も橋渡し役として成長し、少しずつですが、みんなが溶け込んできているのかなと感じます。

■コーディネーター

ありがとうございました。移住者へのソフト面でのサポートのお話をいただきました。

さて、先ほど泰阜村の横前村長から、泰阜村はある意味で、東京から遠いところなのでゆっくりせざるを得ない、というご発言をいただきました。今後道路やリニア中央新幹線が通り、ハード面で便利な場所になって、泰阜村のゆっくりせざるを得ないという環境が変わっていく中で、それでも都会から人を引きつけるためにどうやって差別化やアピールをしていくか、ということのビジョンについてお話をお伺いしたいと思います。

■泰阜村長 横前 明 氏

三遠南信自動車道の千代インターインターチェンジができると、そこから10分ぐらいで泰阜村に入ることができます。また、飯田市にできるリニア中央新幹線の長野県駅からは、30分ぐらいで泰阜村に入ってくられると思います。それでも泰阜村は一貫して都会を追随しない村づくりをうたっていて、信号機もありませんし、コンビニもありません。こうした不自由なことが差別化だと思っています。先ほど話題にも上がりましたが、1週間のうち5日間一所懸命働いて、リニア中央新幹線を使い東京から飯田まで40分、そこから30分で、この田舎に来ることが出来ます。過去に戻ったような景色が見えて、心が安らぐ、そういった村づくりが必要ではないかと思っています。

■コーディネーター

ありがとうございました。

それではもうお一人、飯田市の牧野市長にぜひお伺いしたいと思いますが、先ほど、飯田市の地域人教育の取組をご紹介いただき、また、それが全国展開の方向に進んでいるとのことでした。そこで、飯田市が行っているのは、飯田市に残りたいという地域人教育なのか、飯田市を超えて三遠南信地域まで意識した地域人教育は展開し得るものなのか、ご見解をいただければと思います。

■飯田市長 牧野光朗

これまでの地域人教育のメインは大学生でした。飯田市以外の地域でも大学生を受け入れて、フィールドスタディをやっているところはあると思います。大学生からすると、初めて出会った地域のことを学び、その地域を学ぶということはどういうことか、ということを経験していきます。三遠南信地域は、伝統芸能の宝庫と言われますし、特徴的な地域づくり、産業づくり、人づくりもされています。それを学ぶことによって、地域づくりにおいて自らができることは何なのかを考えられるようになりますし、我々もそういった人材を求めています。

しかし、それが自分の地元であるのか、三遠南信地域であるのか、もっと別の地域であるのかということは、本人の考え次第であり、自らが地域のことに興味を持って地域に貢献する人材になっていくという当事者意識を持つことができるかどうかということが重要だと私は思っています。

飯田で地域人教育を受けた高校生が、三遠南信地域のほかの自治体で地域づくりを担うことは十分可能だと思いますし、それを三遠南信地域全体でやっていけば、この地域の将来は開けてくると私は思っています。

最後に申し上げたいのは、私はここで大学の役割が問われると思っております。地域人教育を受けた高校生は、実は大学に行きたがりません。大学でこれ以上地域のことを学ぶ機会が持てるかどうか、ということに対して疑問に持っている子が多く、すぐに地域の中に出ていきたがるのです。そこで私は、生まれ育った地域のことだけではなく、地域の外のことも知り、比較する中でより自分たちの地域のことを知り、ネットワークを広げることも大事だと話しています。そういった点からも、高大連携の地域人教育をどう進めていくか、ということ三遠南信地域で考えていくことができれば、素晴らしいと思っております。

■コーディネーター

私も子供たちへの投資は非常に大事だと思っ質問をさせていただきました。牧野市長のお話しに答える義務があるだろうと思しますので、少ししゃべらせていただきます。

今、大学は随分変わってきています。豊橋技術科学大学などの国立の理系の大学は基礎研究が多いので分野にもよりますが、その地域にある、という条件を研究に活かす発想はなかなか出てきにくいところもあると思います。静岡文化芸術大学は浜松市にある公立の大学で、当然、地域とどう関わるかというのは重要な課題になってまいります。私の場合は多文化共生分野における、言わずと知れたブラジル人が最も多い浜松での関わりということになってきます。

先ほどの牧野市長のご指摘に対して、私は必ずしも悲観的ではないのは、学生たちが喜んで地域の学びをしているからです。例えば、本学には船戸という教員がいて、彼は毎週土日になると公用車で浜松の北の北遠地域に赴きます。そこでは、学生がひいこら言いながら、一所懸命田植えをしたり、村のお祭りに参加したり、地域の中か

ら学びを得ています。このことのみならず、学生たちは、大学で学ぶ他地域の事例や理論を、自分たちの関わっている地域と照らし合わせることで、いわば鏡で自分の姿を映すように学びを深めていきます。ですから、三遠南信の地域人としての教育、育成、あるいは気づきの機会の提供といったものに対して、今後地域の大学が連携して取り組んでいくことは、2030年に向けての重要なステップであると、私も考えております。

ここまで「住むなら三遠南信プロジェクト」、それから「人生100年時代プロジェクト」という2つのテーマについて、皆さんで議論してまいりました。多方面からの非常に貴重なご意見をいただいたことに感謝申し上げます。これ以外にもさまざまなご意見があろうかと思いますが、ここで区切りとさせていただきます。

なお、この後の報告会では、皆様からいただいたご意見について、私から報告をさせていただきます。たくさんのお意見が出ましたので、全てを紹介することは難しいですが、主な意見を整理し、ご報告させていただきます。報告の内容につきましては、私にご一任をいただきたいと思います。よろしいでしょうか。

ありがとうございます。皆様のご協力によって円滑、かつ中身の濃い議論を行うことができました。改めて御礼申し上げます。以上をもちまして「住・人」分科会を閉会いたします。